

## 第3章 調査の成果

### 第1節 遺跡の立地と基本層序(第8図)

殿河内定屋ノ前遺跡は、下市川右岸にあり大山山系から北側に派生する標高47～59mの台地上に立地している。地形はさらに、標高55.5～59.0m付近の上部平坦面部(1・5区)、標高55.5～50.0mの斜面部(2・3区東斜面部)、標高50.0～47.7mの谷部(2・3区谷部)、標高46.5～50.0m付近の下部平坦面部から西側斜面部(2・3区西区、4区)に分けることができる。当遺跡から約200m西側の下市川左岸の河岸段丘上には、縄文時代を中心とする集落遺跡である、殿河内上ノ段大ブケ遺跡がある。

調査の結果、標高59m付近の上部平坦面部(1・5区)は近年まで梨畑として土地利用されており、耕作土以下はソフトローム層以下の堆積層が遺構検出面となっていたことが判明した。

また、標高50～55mの斜面部(2・3区東斜面部)は、近年、最大で0.8mの造成土(丘陵部分の掘削によるローム層混じり土)によって傾斜が緩やかにされていることが判明し、さらに斜面上部の掘削はハードローム層以下の礫層にまで掘削が及んでいる箇所があった。この部分の遺構検出面は、概ねソフトローム層であった。

斜面部西側の谷部(2・3区谷部)は、本来浅い谷地形になっており、造成土以下は、造成以前の耕作土(Ⅳ層)、弥生時代中期の遺物を主体に縄文時代後晩期から奈良時代の遺物を包含する、厚さ40～70cmの極暗褐色土から黒色土(Ⅴ・Ⅵ層)、縄文時代中期から弥生時代中期の遺物を包含する、厚さ30～70cmの黒褐色土(Ⅶ層)となり、以下は無遺物の暗褐色土(Ⅷ層：漸移層)、褐色土(Ⅸ層：ソフトローム層)が堆積していた。このうち、第Ⅶ層中では、谷中央部の標高48.8～49.3m付近で点々と焼土が検出されている他、縄文時代の石鏃が出土している。概ね標高48.8m以下では遺物が出土していないので、遺物包含層としては、Ⅶ層上層までと考えられる。

2・3区谷部から4区東側の下部平坦部での遺構検出面は、Ⅴ層からⅦ層上面及びホーキ層上面で、幅10～20cmの農耕用トレンチャーによる掘削が著しい。トレンチャーによる掘削は、SX5の東側までである。

SX5を境にして4区西側の下部平坦面部では、一部クロボク層(4-Ⅳ層)が遺存しており、この層を除去した4-Ⅴ層(漸移層)又は4-Ⅴ層以下のソフトローム層で遺構を検出した。なお、4区西側斜面部は一部カール状に崩落している箇所が認められた。人工的に掘削を受けたものと考えられず、自然崩落したものと考えた。崩落土中には、黒褐色土層(4-Ⅳ層由来)・灰褐色砂質土層(ホーキ層由来)が部分的に互層状になっており、黒褐色土層中から弥生時代後期及び奈良時代の遺物がまとまって出土していることから、すでに失われているが周辺には当該期の遺構が存在していたものと思われる。

### 第2節 遺跡の概要(第7図、PL.1～6)

検出作業の結果、調査区全域に亘って縄文時代から近世にかけての遺構、遺物を大量に検出した。

縄文時代では、1区平坦面、2・3区平坦面から谷部傾斜変換点付近、4区東側平坦面で落とし穴を計19基検出した。そのうち、SK24では埋土上層で縄文時代晩期の粗製土器深鉢が出土した。



弥生時代中期が、本遺跡が最も栄える時期で、ほぼ全域に亘って竪穴建物跡11基、掘立柱建物跡15基、貯蔵穴2基、土壙墓2基、木棺墓1基、その他の土坑20基、溝4基、段状遺構1基、柵列3基、ピット群13箇所、土器溜り3箇所を検出した。

奈良時代から平安時代では、土坑SK38、道路と考えられるSX1～4・6を検出した。

近世以降では、道路SX5を検出した。近年まで退休寺から大山へ参詣する道路として利用されていたものと考えられ、調査区南側で原位置は保っていないが、道標が置かれていた。

その他、時期不明の土坑7基、溝1基、集石1基を検出した。

### 第3節 縄文時代の調査成果

#### 1 概要(第9図)

縄文時代の遺構は、落とし穴計19基を検出した。1区では5基(SK3・7・11・18・40)、2・3区では11基(SK4・10・24・26・31・34・36・41・42・43・46)が、4区では3基(SK17・50・51)を検出した。

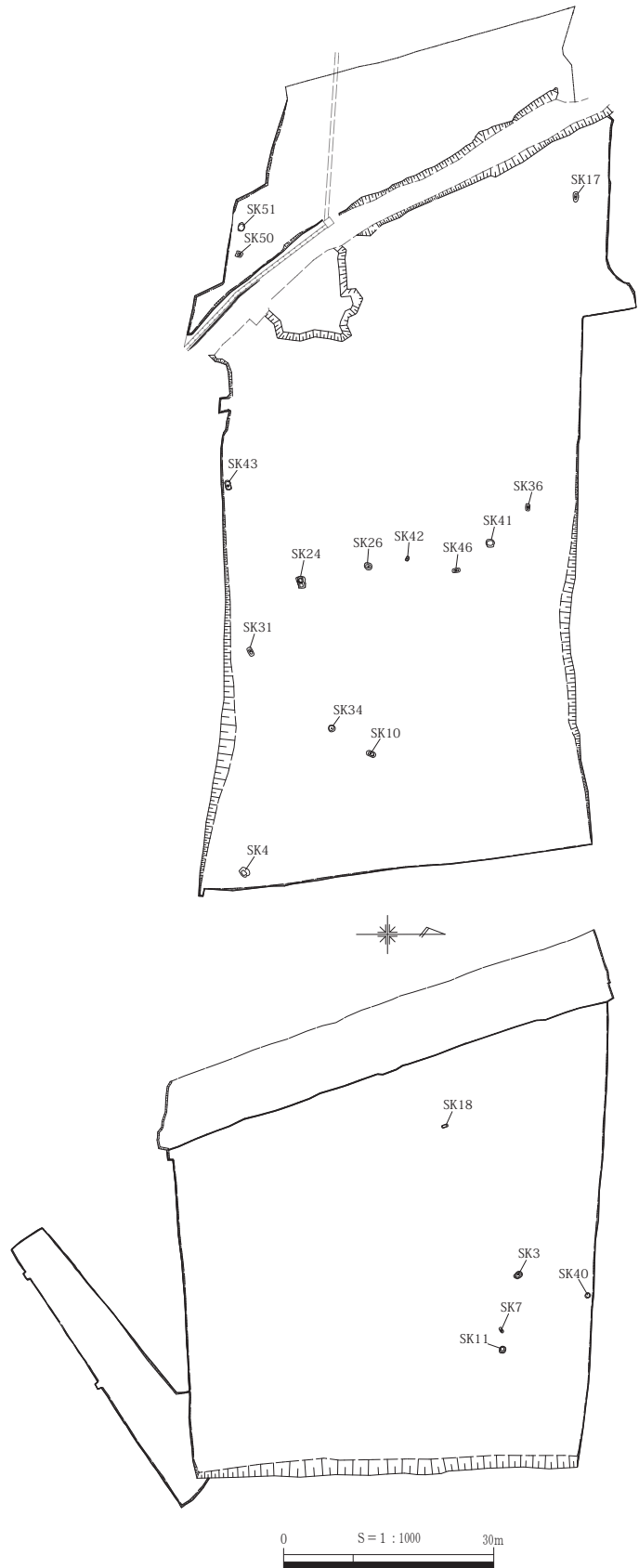
確実な時期をおさえることはできないが、SK24から縄文時代後晩期と考えられる深鉢が出土した。2・3区谷部周辺で検出した落とし穴は、谷部堆積層のうち極暗褐色土から黒色土中(V・VI層)で検出されたものがあり、この堆積層中には、縄文時代中期から晩期の土器がわずかに含まれていることから、大まかな時期を推定することができる。

#### 2 落とし穴

##### SK3(第10図、PL.7)

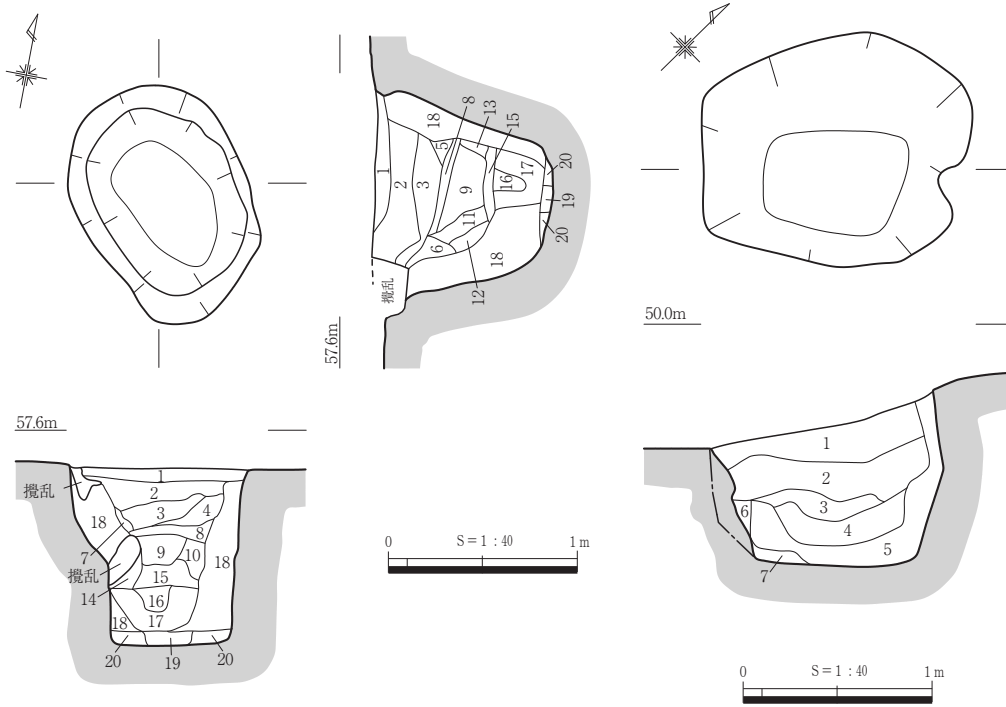
1区中央から北寄りのC4グリッド北東隅付近にあり、標高57.5m付近の台地上平坦面に位置する。溝SD1より東側にあり、すぐ東側に隣接して、土坑SK2がある。表土直下のソフトローム層上面で検出した。

平面は、北西-南東方向に長い不整な長楕円形を呈し、長軸1.25m、短軸0.90mを測る。



第9図 縄文時代遺構分布図

### 第3章 調査の成果



- 1 黒褐色土(7.5YR2/2) φ2~3mm程度の砂礫、ロームブロックをやや密に含む
- 2 黒色土(7.5YR2/1) 粗砂とφ1mm程度のローム粒を少量含む
- 3 黒褐色土(10YR2/2) 細砂を多く含む
- 4 黒色土(7.5YR2/1) 細砂を少量含む
- 5 黒色土(7.5YR1.7/1) φ1mm程度のローム粒を多く含む
- 6 黒褐色土(10YR2/3) 細砂とφ1mm未満のローム粒を多く含む
- 7 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックが多く混じる
- 8 黒色土(10YR2/1) 細砂を多く含む
- 9 黒色土(10YR2/1) 細砂を少し含む
- 10 褐色土(10YR4/4) 細砂を少し含む。ソフトロームとクロブロックの混濁土
- 11 黒褐色土(10YR2/3) 細砂を多く含む
- 12 黒褐色土(10YR2/3) 細砂とφ1mm程度のローム粒を多く含む
- 13 黒色土(10YR2/1) 細砂とφ1mm程度のローム粒を多く含む
- 14 黒褐色土(10YR2/3) φ1mm未満のローム粒を少し含む
- 15 黒褐色土(10YR2/3) 細砂を少し含む。ロームブロックを多く含む
- 16 黒褐色土(10YR2/2) φ1mm未満のローム粒を少し含む
- 17 暗褐色土(10YR3/3) ソフトロームベース
- 18 橙色土(7.5YR6/8) ハードロームベース。ATブロックが多く混じる
- 19 暗褐色土(10YR3/3) 粗砂とφ1~2mm程度のローム粒をやや密に含む
- 20 にぶい褐色土(7.5YR5/3) ロームブロックが混じる

第10図 SK3

- 1 黒褐色土(7.5YR3/2)
- 2 黒色土(7.5YR2/1)
- 3 暗褐色土(7.5YR3/3) 黄褐色ローム粒を多量に含む
- 4 極暗褐色土(7.5YR2/3) 黄褐色ローム粒を含む
- 5 黒褐色土(7.5YR3/1) 黄褐色ロームブロックを含む
- 6 黒褐色土(7.5YR3/2) 黄褐色ローム粒を多量に含む
- 7 明褐色土(7.5YR5/6) 暗褐色土混じり

第11図 SK4

断面は逆台形状を呈し、深さ0.94mを測る。底面も平面と同様、不整な長楕円形を呈し、長軸0.71m、短軸0.42mである。主軸はN-43°-Wである。

埋土は、底面に薄く暗褐色土(19層)およびにぶい褐色土(20層)が堆積し、その上に地山のハードローム

にATブロックが混じる、しまり・粘性ともに強い橙色土(18層)が全体的に20~30cm程度の厚さで堆積する。その上層の底面付近にソフトローム主体の暗褐色土(17層)が20~30cm程度あり、その上にしまり、粘性ともに弱い黒色土または黒褐色土を主体

とする埋土が遺構上面まで自然堆積している。17層の中央には、16層が径10~20cm程度、深さ約15cm程度の範囲で堆積しており、逆杭の痕跡の可能性がある。すなわち、17・18層は、一度人為的に埋め戻された埋土の可能性がある。

遺物は出土しなかったが、形態的特徴や規模、埋土の状況などから判断して、縄文時代の落とし穴と考えられる。

#### SK4 (第11図、PL.7)

2区南東側のG10グリッドにあり、標高54.6~55.1mの斜面部に立地する。造成土を除去した後のソフトローム層上面で検出した。北西側約23mにはSK34がある。

平面は不整な隅丸長方形を呈し、長軸1.5m、短軸1.36mを測る。断面は不整な逆台形状を呈し、深さは最大1.08mである。底面は不整な長方形を呈し、長軸0.8m、短軸0.58mを測る。底面ピットはない。

埋土は黒褐色土を主体とする7層に分層できた。中央部は1~4層が皿状に堆積しているが、これらの層は本来の5層を二次的に掘り込み、その後自然堆積したものと考えられる。

時期を判断する遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK 7 (第12図、PL. 7)

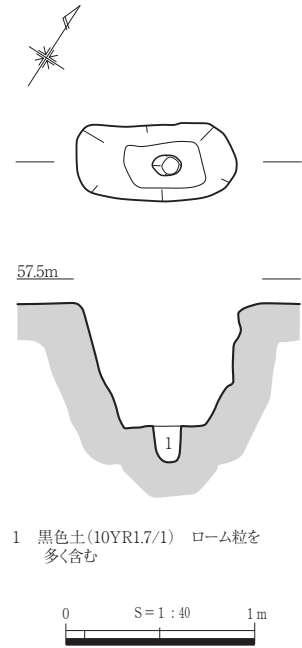
1区北東寄りのC3グリッド中央付近にあり、標高57.0m付近の台地上から東側に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。表土直下のソフトローム層上面で検出した。すぐ東側には落とし穴SK11がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸0.84m、短軸0.40mを測る。縦断面は、逆台形状を呈し、底面までの深さ0.64mを測る。底面は不整な長方形を呈し、長軸0.40m、短軸0.22mを測る。主軸はN-57°-Eである。

また底面ピットは、底面中央にあり、径12~16cm程度、深さ18cmを測る。

埋土は、底面ピットを含め黒色土を主体とし、ローム粒を多く含んでいた。

遺物は出土しなかったが、底面ピットの存在や形態的特徴から、縄文時代の落とし穴と考えられる。



1 黒色土(10YR1.7/1) ローム粒を多く含む

第12図 SK7

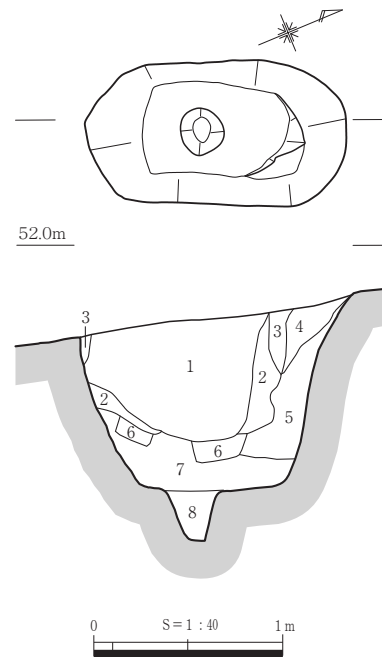
SK10(第13図、PL. 7)

2区北東側のE11グリッドにあり、標高51.4~51.7mの斜面部に立地する。造成土を除去した後のソフトローム層上面で検出した。南西側約6mにはSK34がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.36m、短軸0.75mを測る。断面は不整な逆台形状を呈し、深さは最大0.94mである。底面は不整な隅丸長方形を呈し、長軸0.75m、短軸0.49mを測る。中央には径0.25m、深さ0.29mを測るピットが、礫層まで掘り込まれる。

埋土は黒褐色土を主体とする8層に分層できた。中央部の第1層は、二次的に2層以下を掘り込んだ後に自然堆積したものと考えられる。

時期を判断できる遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



- 1 黒色シルト(7.5YR1.7/1) ホーキ粒多く含む
- 2 黒色シルト(10YR2/1) ホーキ粒含む
- 3 黒褐色シルト(10YR2/2) ホーキ粒含む。地山ブロック土混じる
- 4 暗褐色シルト(10YR3/4) 地山ブロック土多く混じる
- 5 黒褐色粘質土(10YR3/2) 砂と地山ブロック土混じる
- 6 暗赤褐色粘質土(2.5YR3/3) 砂含む
- 7 黒色シルト(10YR1.7/1)
- 8 暗褐色粘質土(10YR3/4) 砂混じる

第13図 SK10

SK11(第14図、PL. 7)

1区北東寄りのC3グリッド中央よりやや東側にあり、標高57.0m付近の上部平坦面から東側に緩やかに傾斜する斜面上に位置する。このSK11が台地の東限付近にあり、これより東側は谷地形に変化し傾斜する。すぐ西側には落とし穴SK7がある。表土直下のソフトローム層上面で検出したが、遺構上面は、梨畑として利用された際に攪乱されていた。

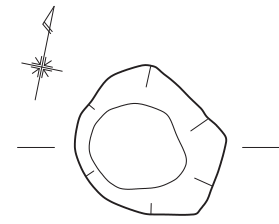
平面、底面ともに不整円形を呈しており、径約0.80m、底面の径0.46~0.52mを測る。断面は、縦

### 第3章 調査の成果

長の長方形を呈し、深さは1.38mである。

埋土は、黒色土または黒褐色土にローム粒またはロームブロックを多く含んでおり、上層では細かく分層できた。

遺物は出土せず、底面ピットも検出できなかったが、埋土の状況や平面・断面形態の特徴、規模等から判断して、縄文時代の落とし穴と考えられる。



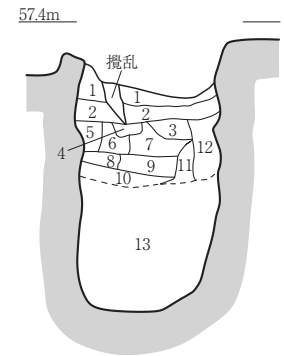
#### SK17(第15図、PL.8)

4区中央北側のB19グリッドにあり、標高49.4m付近の下部平坦面に立地する。クロボク層(黒褐色土)を除去した後のソフトローム層上面で検出した。南側約2mにはSI5がある。

平面は不整な長楕円形を呈し、長軸1.5m、短軸0.74mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.87mである。底面は長楕円形を呈し、長軸0.74m、短軸0.33mを測る。中央に長軸0.2m、短軸0.16m、深さ0.17mのピットが掘り込まれる。ピット内周縁には、径10cm以内の小礫が出土しており、ピット内に立てた逆杭の裏込めと考えられる。

埋土は黒色土を主体とする5層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

時期を判断できる遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



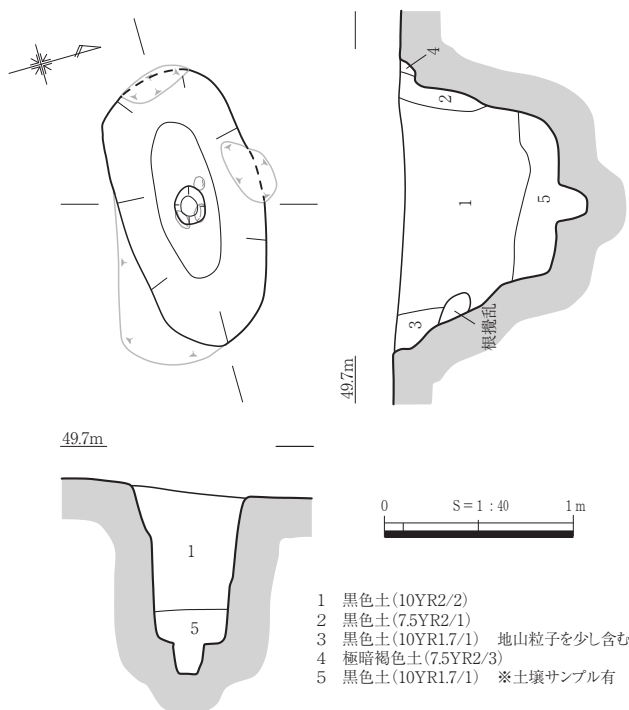
- 1 黒色土(7.5YR2/1) 細砂・粗砂、φ1~2mmのローム粒を多く含む
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 細砂・粗砂、やや大粒のロームブロックをやや密に含む
- 3 黒色土(10YR1.7/1) 細砂とφ1~2mmのローム粒を多く含む
- 4 黒色土(10YR2/1) 細砂とφ1~2mmのローム粒を多く含む
- 5 黒褐色土(10YR3/1) ロームブロックをやや密に含む
- 6 黒色土(7.5YR2/1) φ1~4mmのローム粒を多く含む
- 7 黒色土(10YR2/1) 細砂を少量含む
- 8 黒色土(10YR2/1) 細砂、φ1~2mmのローム粒を多く含む
- 9 黒色土(10YR1.7/1) 細砂を多く含む
- 10 黒色土(10YR1.7/1) φ1mm程度のローム粒を少し含む
- 11 黒褐色土(10YR2/2) ロームブロックを多く含む
- 12 黒褐色土(10YR2/3) ロームブロックをやや密に含む
- 13 黒色土または黒褐色土

#### SK18(第16図、PL.8)

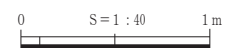
1区西寄りのD6グリッド中央より北寄りにあり、標高58.0m付近の上部平坦面に位置する。縦穴住居跡SI2の南東隅付近に接している。表土直下のソフトローム層上面で検出した。遺構上面は、梨畑利用時に攪乱されていた。

平面は、北西-南東方向に長い隅丸長方形で、長軸0.90m、短軸0.38mを測る。縦断面は逆台形状を呈し、深さ0.80mである。底面は、平面と同様、隅丸長方形を呈し、長軸0.64m、短軸0.31mである。主軸は、N-21°-Wである。底面ピットは無い。

埋土は、しまりがやや強い黒褐色土または極暗褐色土を主体とし、壁面に接する埋土(2・

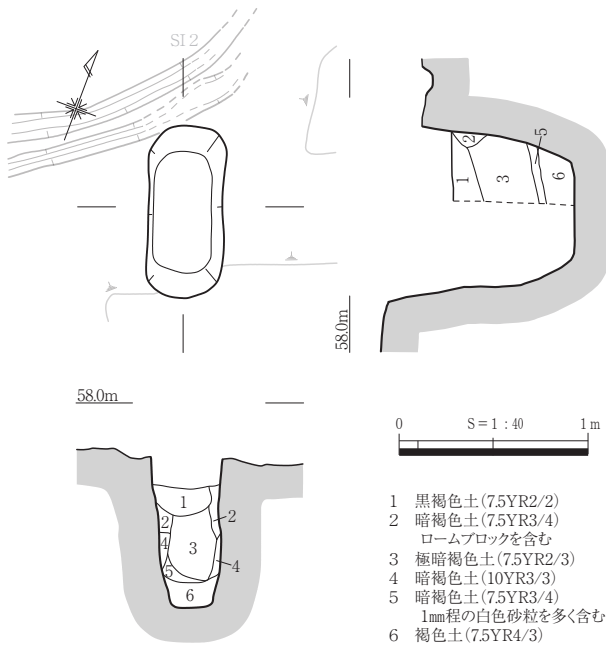


第15図 SK17



第14図 SK11

- 1 黒色土(10YR2/2)
- 2 黒色土(7.5YR2/1)
- 3 黒色土(10YR1.7/1) 地山粒子を少し含む
- 4 極暗褐色土(7.5YR2/3)
- 5 黒色土(10YR1.7/1) ※土壌サンプル有

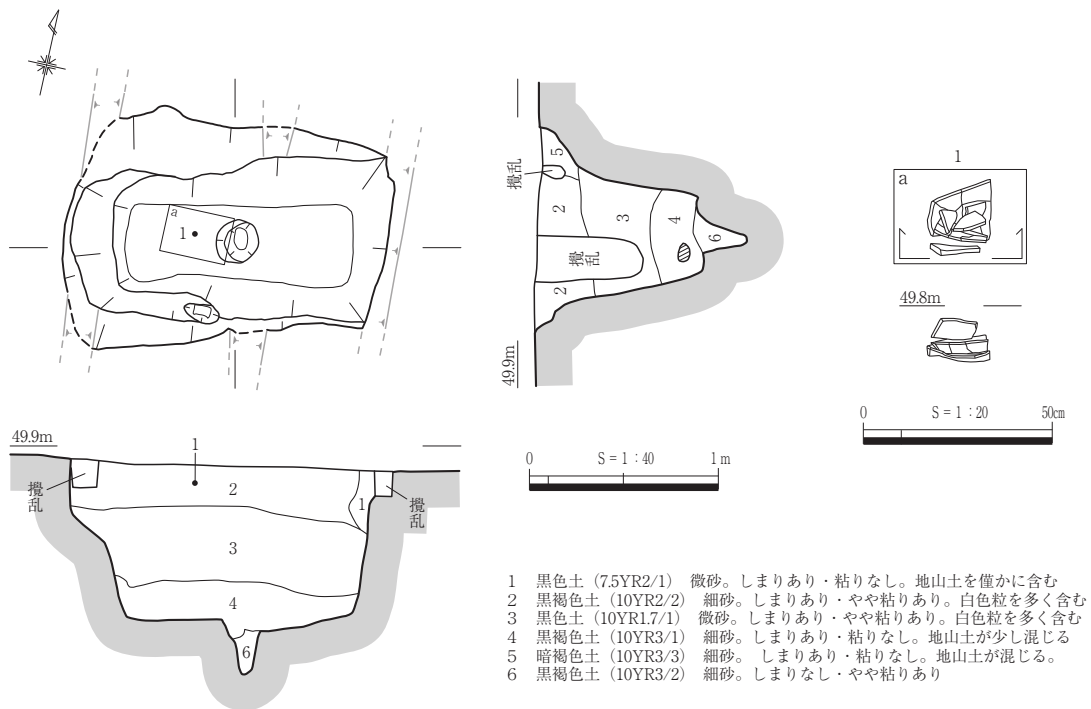


第16図 SK18

ら縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK24(第17・18図、PL.8・47)

2区南西側のF14グリッドにあり、標高49.7m付近の谷部西側緩斜面に立地する。旧耕作土を除去した後の黒褐色土からソフトローム層上面で検出した。北側約9mにはSK26、南東側約11mにはSK31がある。

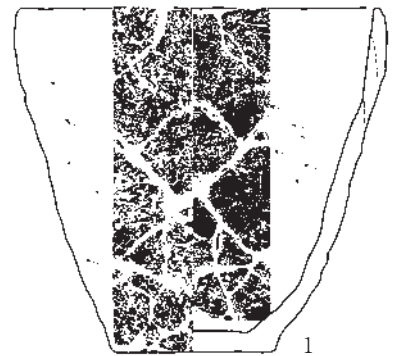


第18図 SK24

4層)は、しまり・粘性ともにやや強い。最下層の6層は、しまり・粘性ともにやや強い褐色土である。埋土は、この地域の一般的な落とし穴におけるクロボク主体の埋土に比べ、しまり、粘性ともに強い土であることが特徴である。

時期を判断する遺物は出土していないが、埋土下層を水洗選別して得た炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値 $12,060 \pm 40BP$  (IAAA-103152)という年代値を得た。測定した試料が遺構より古い炭化物の再堆積であったと考える。

埋土の状況及び形態的特徴か



0 S 1:4 1m

第17図 SK24出土遺物

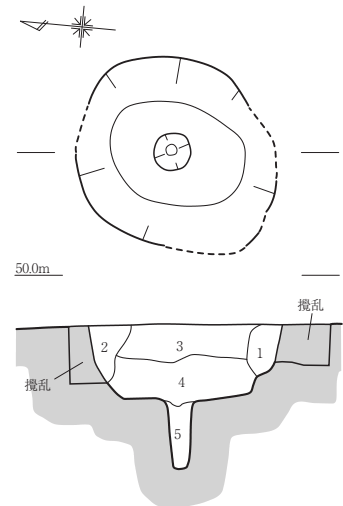
### 第3章 調査の成果

平面は長方形を呈し、長軸1.7m、短軸1.06mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.9mである。底面は長方形を呈し、長軸1.2m、短軸0.36mを測る。中央に径0.25m、深さ0.25mのピットが掘り込まれる。

埋土は黒褐色土を主体とする6層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。最下層の第4層中で床面からやや浮いた状態で円礫が出土しており、逆杭を固定したものの可能性がある。

埋土上層の第2層中から、縄文土器粗製深鉢1が円礫とともに潰れたような状態で出土した。また、底面ピット埋土を水洗選別して得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $170 \pm 20$ BP (IAAA-103153)の値が得られた。この値は近世から近代の数値であり、底面ピット半裁時に水没等により混入した炭化物を計測用試料としてしまったものと考えられる。

出土遺物及び形態的特徴から、縄文時代晩期ごろの落とし穴と考えられる。



#### SK26(第19図、PL.8)

2区西側のE14グリッドにあり、標高49.7m付近の谷部西側緩斜面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。北側約5mにはSK42、南側約9mにはSK24がある。

平面は不整な円形を呈し、長軸1.1m、短軸1.0mを測る。断面はやや浅い逆台形状を呈し、深さは最大0.4mである。底面は楕円形を呈し、長軸0.73m、短軸0.55mを測る。中央に径0.18m、深さ0.35mのピットが掘り込まれる。

埋土は黒褐色土を主体とする5層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

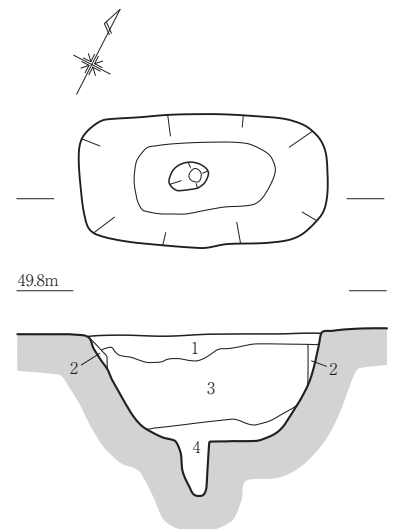
遺物は出土していないが、底面ピット埋土を水洗選別して得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $2,830 \pm 20$ BP (IAAA-103154)の年代値を得た。この数値は、縄文晩期ごろを示すものと考えられる。

埋土の状況、形態的特徴及び年代測定の結果から、縄文時代晩期ごろの落とし穴と考えられる。

- 1 黒色土(7.5YR2/1) 微砂
- 2 黒褐色土(7.5YR2/2) 微砂。地山ブロック混じる
- 3 黒色土(10YR2/1) 微砂
- 4 黒色土(10YR1.7/1) 微砂
- 5 におい赤褐色土(2.5YR4/4) 細砂

0 S=1:40 1m

第19図 SK26



- 1 黒色土(10YR1.7/1) ホーキブロックをわずかに含む
- 2 黒褐色土(2.5YR3/1) ホーキ粒を含む
- 3 黒色土(10YR2/1) ホーキブロックを含む
- 4 黒褐色土(10YR3/1) ホーキ粒含む

0 S=1:40 1m

第20図 SK31

#### SK31(第20図、PL.8)

2区中央南側のG13グリッドにあり、標高49.5～49.6m付近の緩斜面に立地する。旧耕作土を除去した後の黒褐色土中で検出した。北西側約11mにはSK24がある。

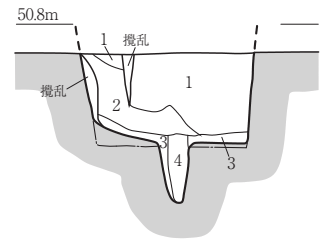
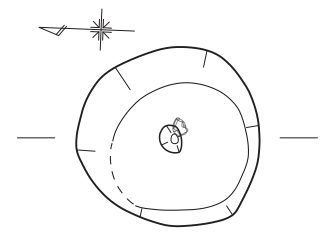
平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.29m、短軸0.69mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.63mである。底面は長方形を呈し、



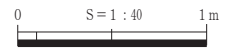
長軸0.73m、短軸0.55mを測る。中央に長軸0.2m、短軸0.13m、深さ0.3mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒色土から黒褐色土を主体とする4層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。底面ピット内で小礫が出土しており、逆杭を固定した可能性がある。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態の特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



- 1 黒褐色土(10YR1.7/1) 粘質
- 2 暗褐色土(10YR2/2) 細砂
- 3 淡黄褐色土(10YR3/3) 粘質。  
地山土と1層または2層土が混じる
- 4 暗黄褐色土(2.5YR2/1) 粘質



第21図 SK34

SK34(第21図、PL.8)

2区中央やや東寄りのE12グリッドにあり、標高50.1～50.7m付近の斜面部に立地する。旧耕作土を除去した後、黒色土から黒褐色土をかなり掘り下げた段階で検出した。本来の掘り込みは、さらに高い位置であったものと考えられる。北東側約5mにはSK10がある。

平面は不整な円形を呈し、長軸0.99m、短軸0.95mを測る。断面は長方形形状を呈し、深さは最大0.53mである。底面は円形を呈し、長軸0.7m、短軸0.67mを測る。中央に長軸0.18m、短軸0.1m、深さ0.32mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒褐色土から暗褐色土を主体とする4層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。底面ピット脇で小礫が出土しており、逆杭を固定した可能性がある。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態の特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

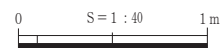
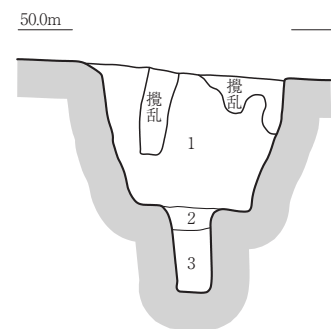
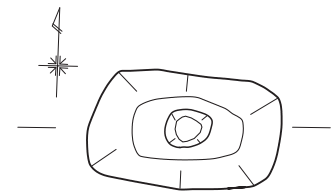
SK36(第22図、PL.9)

3区北西側のC15グリッドにあり、標高49.6m付近の谷部西側緩斜面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。南東側約7mにはSK41がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.0m、短軸0.63mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.68mである。底面は長楕円形を呈し、長軸0.53m、短軸0.33mを測る。中央に長軸0.24m、短軸0.2m、深さ0.45mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒色土系の3層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態の特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



- 1 黒色土(10YR1.7/1) ホーキ粒少し含む。  
地山ブロック若干含む
- 2 黒色土(7.5YR1.7/1)
- 3 黒色土(7.5YR1.7/1)と地山ブロックの混在土

第22図 SK36

SK40(第23図、PL.9)

1区中央の北壁付近、B4グリッドの北東隅にあり、標高57.0～57.5m付近の上部平坦面に位置する。約10m西側にはSI11が位置する。表土直下のソフトローム層上面で検出した。しかし、遺構の南東隅は、

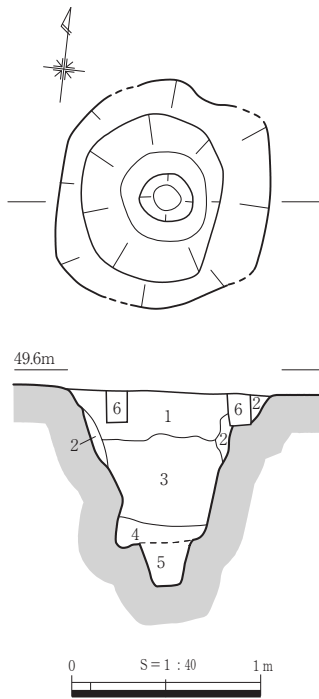
### 第3章 調査の成果

梨畑として土地利用された際に壊されており、50cm程度掘り下げたハードローム層中で検出した。

平面、底面ともに不整形円形を呈し、径1.28m、底面での径1.14mを測る。断面形態は、中央付近がやや膨らむが、概ね縦長の長方形状を呈し、深さ1.06mとなる。底面ピットは無い。

埋土は、1～6層は黒色土または黒褐色土を主体とする自然堆積である。底面付近の7～10層のうち、7層では、しまり、粘性ともにやや強い黒色土が、径10～20cm程度、深さ約20cmの範囲で堆積するほか、8・10層もやや強くしまることから、7層が逆杭の痕跡で、8～10層で固定した可能性がある。

遺物は出土していないが、埋土下層を水洗選別して得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $5,630 \pm 30BP$  (IAAA-103155) という年代値を得ることができた。この数値は、概ね



- 1 黒褐色土(10YR3/1)
- 2 暗褐色土(10YR3/3) ロームブロックを含む
- 3 黒色土(10YR2/1) ローム粒をわずかに含む
- 4 黒褐色土(10YR2/2) シルト質。ホーキ粒を含む
- 5 黒褐色土(10YR2/3)
- 6 褐灰色土(10YR4/1) 攪乱土

第24図 SK41

3区西側のC14グリッドにあり、標高49.5m付近の谷部西側緩斜面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。北西側約7mにはSK36が、南東側約5mにはSK46がある。

平面は不整な円形を呈し、長軸1.22m、短軸1.11mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.85mである。底面は円形を呈し、長軸0.47m、短軸0.42mを測る。中央に長軸0.38m、短軸0.27m、深さ0.2mのピットが掘り込まれる。

SK42(第25図、PL.10)

埋土は、黒褐色土系の5層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

遺物は出土していないが、埋土下層を水洗選別して得られた炭化物の放射性炭素年代測定を行ったところ、補正年代値で $5,630 \pm 30BP$  (IAAA-103155) という年代値を得ることができた。この数値は、概ね

縄文時代早期から前期にかけての数値と考えられる。埋土の状況、形態的特徴及び年代測定結果から、縄文時代早期から前期の落とし穴と考えられる。

SK41(第24図、PL.9)

3区西側のC14グリッドにあり、標高49.5m付近の谷部西側緩斜面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。北西側約7mにはSK36が、南東側約5mにはSK46がある。

平面は不整な円形を呈し、長軸1.22m、短軸1.11mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.85mである。底面は円形を呈し、長軸0.47m、短軸0.42mを測る。中央に長軸0.38m、短軸0.27m、深さ0.2mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒褐色土系の5層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

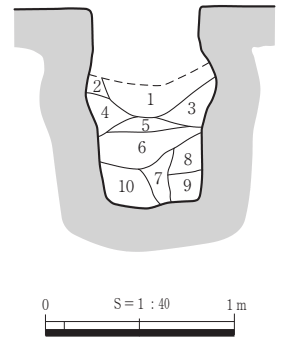
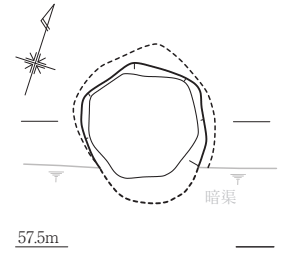
遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

SK42(第25図、PL.10)

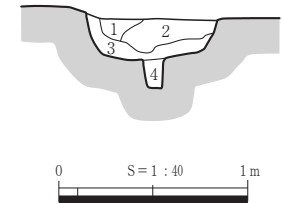
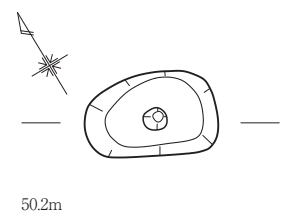
埋土は、黒褐色土系の5層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



- 1 黒色土(10YR1.7/1) φ1～2mmのローム粒を多く含む
- 2 黒褐色土(7.5YR2/2) φ1～2mmのローム粒をやや密に含む
- 3 暗褐色土(10YR3/2) φ1～2mmのローム粒を多く含む
- 4 黒褐色土(10YR2/2) φ1～3mmのローム粒をやや密に含む
- 5 黒色土(10YR2/1) φ1～2mmのローム粒を多く含む。φ5mm大のロームブロックを含む
- 6 黒色土(10YR1.7/1) φ1～2mmのローム粒を少量含む
- 7 黒色土(10YR1.7/1) φ1～2mmのローム粒を少量含む
- 8 黒褐色土(10YR3/1) φ1～2mmのローム粒をやや密に含む
- 9 黒褐色土(10YR3/1) φ1～2mmのローム粒をやや密に含む
- 10 黒色土(10YR1.7/1) φ1～2mmのローム粒を少量含む

第23図 SK40



- 1 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒を少し含む。ホーキ粒を若干含む
- 2 黒褐色土(10YR2/2) 地山粒・粒子を多く含む。地山ブロックを少し含む。ホーキ粒を若干含む
- 3 黒色土(10YR2/1) 地山粒・粒子を多く含む。ホーキ粒を若干含む
- 4 黒褐色土(10YR2/2) ホーキ粒を含む

第25図 SK42

斜面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。北東側約5mにはSK46が、南側約4mにはSK26がある。

平面は不整な隅丸長方形を呈し、長軸0.7m、短軸0.44mを測る。断面は浅い逆台形状を呈し、深さは最大0.2mである。底面は不整な長楕円形を呈し、長軸0.52m、短軸0.24mを測る。中央に径0.14m、深さ0.16mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒色から黒褐色土系の4層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

**SK43(第26図、PL.10)**

2区南西側のG15グリッドにあり、標高50.1m付近の下部平坦面に立地する。表土を除去した後のホーキ層上面で検出した。北東側約15mにはSK24がある。

平面は隅丸長方形を呈し、長軸1.4m、短軸0.84mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.56mである。底面は隅丸長方形を呈し、長軸1.17m、短軸0.62mを測る。中央に径0.27m、深さ0.41mのピットが掘り込まれる。

埋土は、黒褐色から暗褐色土系の6層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。

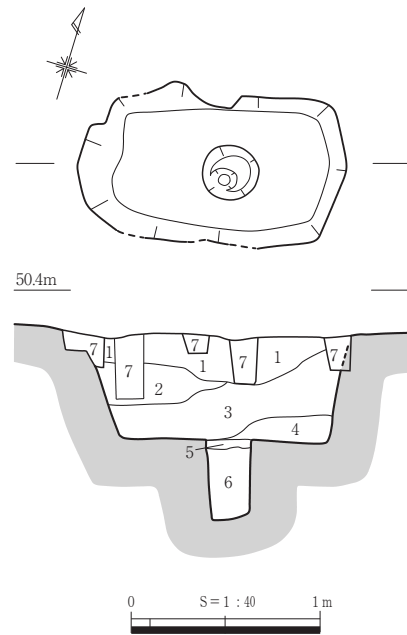
**SK46(第27図、PL.10)**

3区南西側のD14グリッドにあり、標高48.9～49.0m付近の谷部西側緩斜面に立地する。表土を除去した後の谷堆積である黒褐色土からソフトローム層上面で検出した。北西側約7mにはSK41が、南側約5mにはSK42がある。

平面形は隅丸長方形を呈し、長軸1.11m、短軸0.59mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.84mである。底面は隅丸長方形を呈し、長軸0.65m、短軸0.26mを測る。中央に径0.22m、深さ0.32mのピットが掘り込まれる。

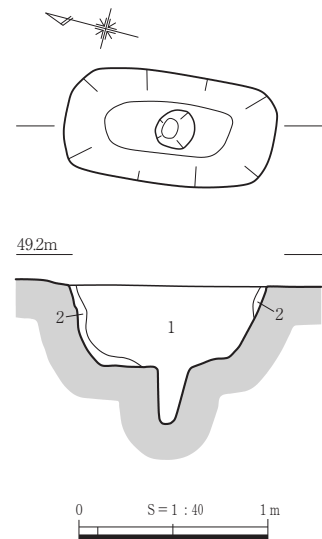
埋土は、黒色土系の2層に分層できた。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態的特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



- 1 暗褐色土(10YR3/3) シルト質。ホーキブロックを含む
- 2 黒褐色土(10YR3/1) 1～3cm大のホーキブロックを含む
- 3 黒褐色土(10YR3/2) 1～10cm大のホーキブロックを多量に含む
- 4 暗褐色土(10YR3/3) シルト質
- 5 黒褐色土(10YR3/1) シルト質。ホーキブロックを含む
- 6 黒褐色土(10YR3/2) シルト質。ホーキブロックをわずかに含む
- 7 黒褐色土(10YR3/1) 攪乱土

第26図 SK43



- 1 黒色土(10YR2/1) 地山粒を若干含む
- 2 黒色土(10YR2/1) 地山ブロック粒を多く含む

第27図 SK46

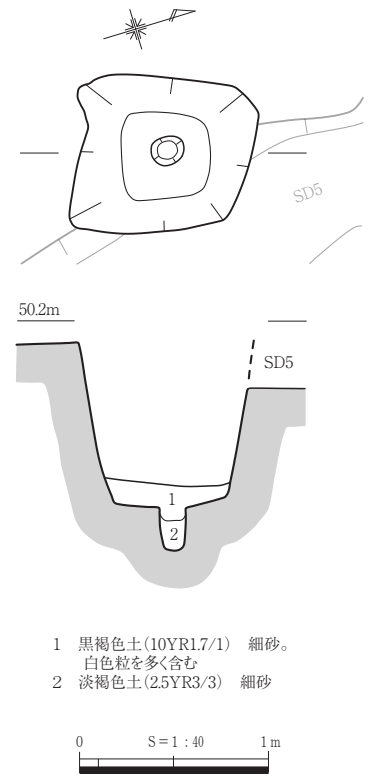
SK50(第28図、PL.10)

4区中央南側のG18グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に立地する。表土を除去した後のソフトローム層上面で検出した。東側肩部はSD5によって掘削されている。西側約3mにはSK51がある。

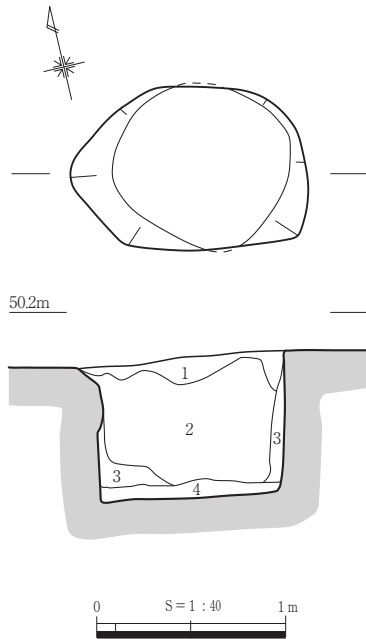
平面は不整な方形を呈し、長軸0.87m、短軸0.83mを測る。断面は逆台形状を呈し、深さは最大0.82mである。底面は方形を呈し、長軸0.47m、短軸0.46mを測る。中央に長軸0.18m、短軸0.15m、深さ0.23mのピットが掘り込まれる。

周辺は後世に攪乱されており、かなり掘り下げた段階で遺構と判断したために、わずかに黒褐色土系の2層を確認した。自然堆積したものと考えられる。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態の特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



第28図 SK50



- 1 暗褐色土(5YR2/1) 微砂
- 2 暗褐色土(7.5YR1.7/1) 細砂
- 3 暗褐色土(10YR2/3)
- 4 黄褐色土(10YR3/3) 地山土が多く混じる

第29図 SK51

SK51(第29図、PL.10)

4区中央南側のG19グリッドにあり、標高50.0m付近の下部平坦面に立地する。表土を除去した後のソフトローム層上面で検出した。東側約3mにはSK50がある。

平面は不整な隅丸五角形を呈し、長軸1.25m、短軸0.84mを測る。断面は一部袋状になる長形状を呈し、深さは最大0.84mである。底面は隅丸方形を呈し、長軸0.9m、短軸0.82mを測る。底面ピットはない。

埋土は、暗褐色土を主体とする4層を確認した。壁際及び底面付近は地山ロームを多く含む層である。

遺物は出土していないが、埋土の状況及び形態の特徴から縄文時代の落とし穴と考えられる。



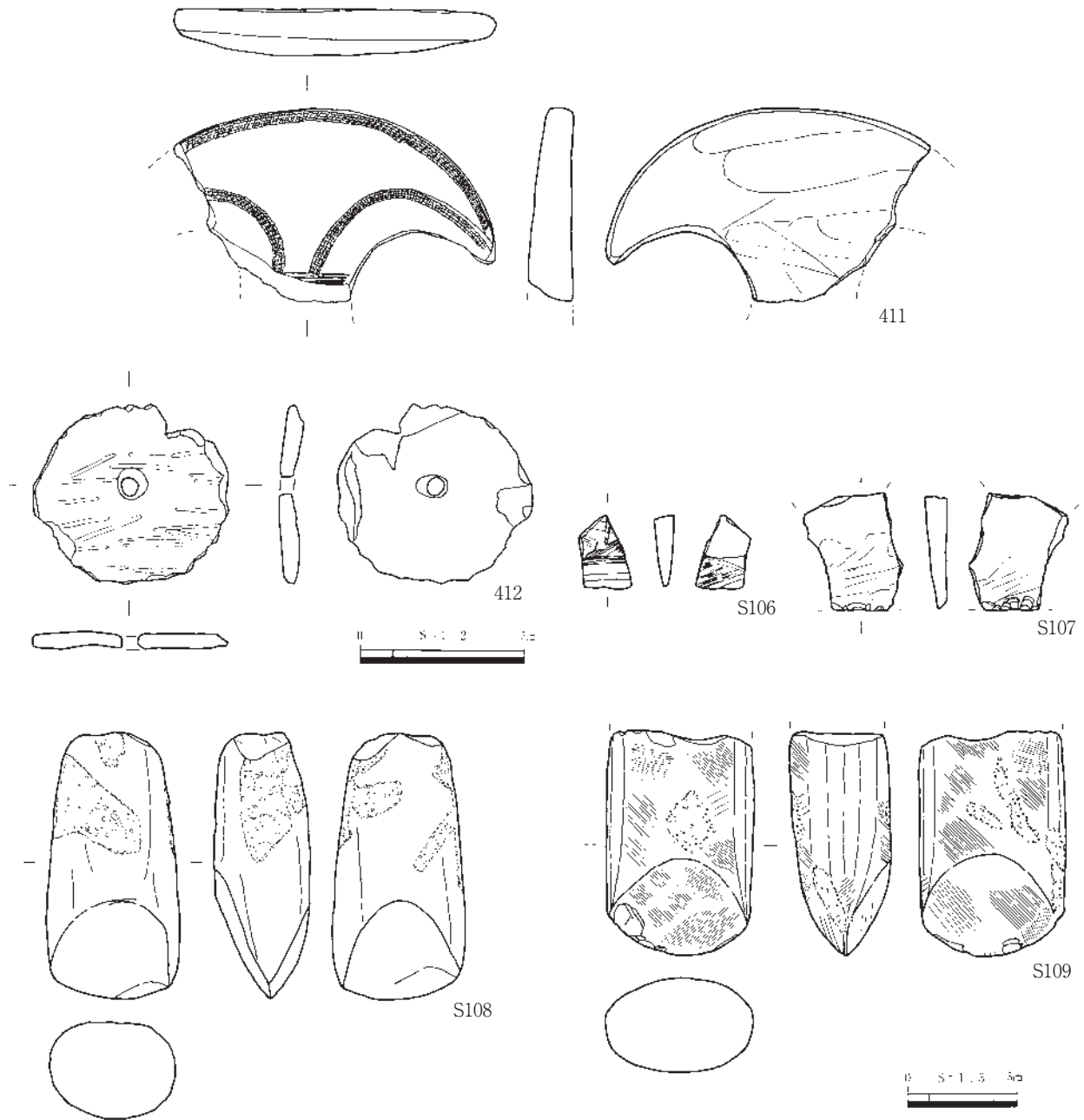
文中写真5 平成22年度1区作業風景(2)



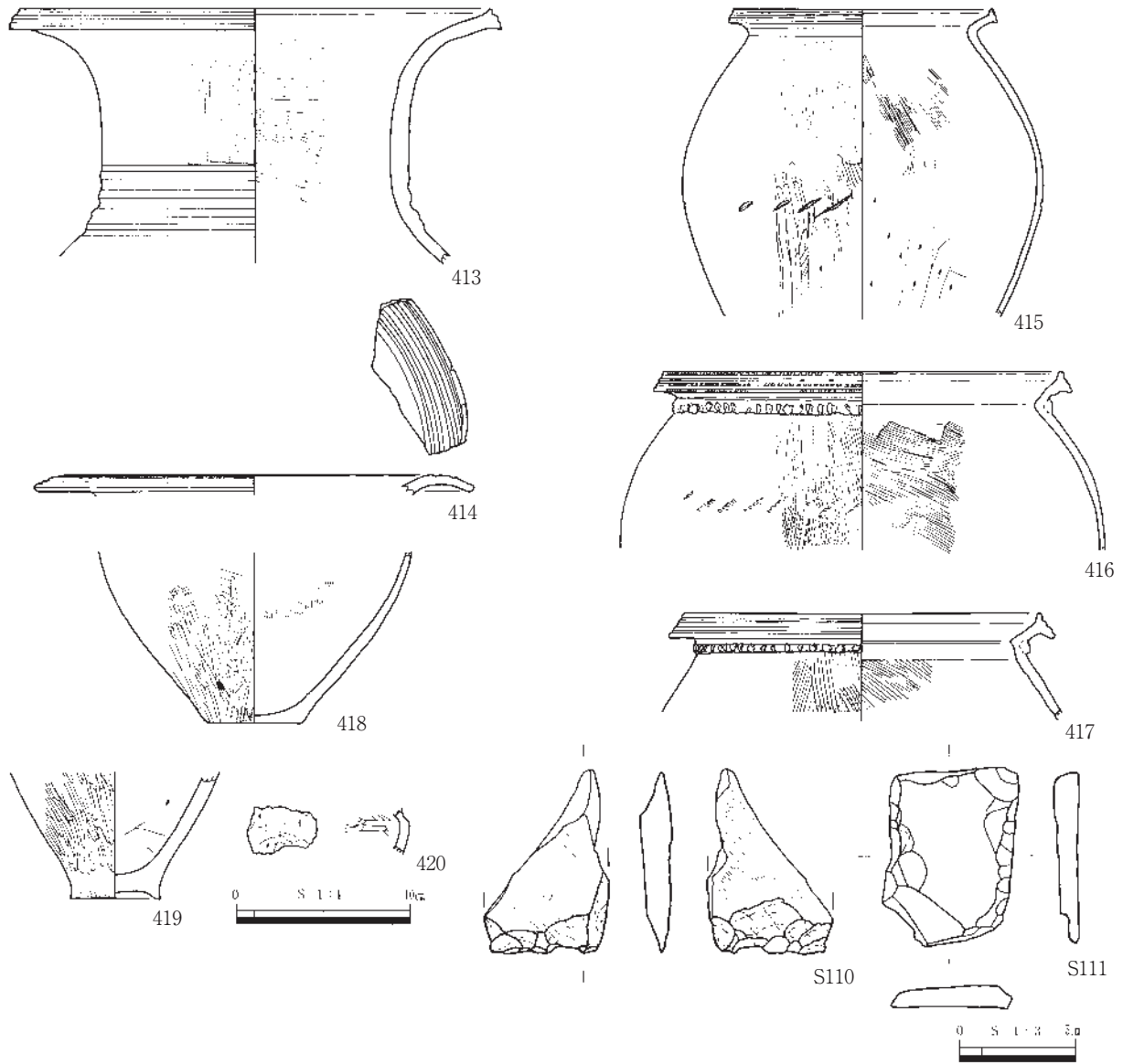
文中写真6 平成23年度5区作業風景

また、405～408は奈良時代の遺物で、405は内外面赤色塗彩が施された土師器皿、406は土師器坏片である。

407は小さな輪状つまみを持つ須恵器蓋、408～410は須恵器高台坏片である。いずれも八峠編年奈良初期に相当するものと考えられる。



第193図 4区4-Ⅳ層出土遺物実測図(2)



第194図 1区遺構外出土遺物

第9節 遺構外遺物

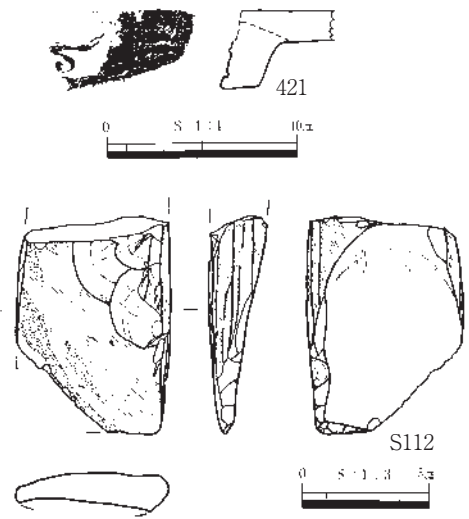
1 1区遺構外遺物(第194図、PL.80・84)

1区の表土中や攪乱土中からも、多くの弥生土器や石器が出土している。そのうち、図化できたものについて以下に述べる。

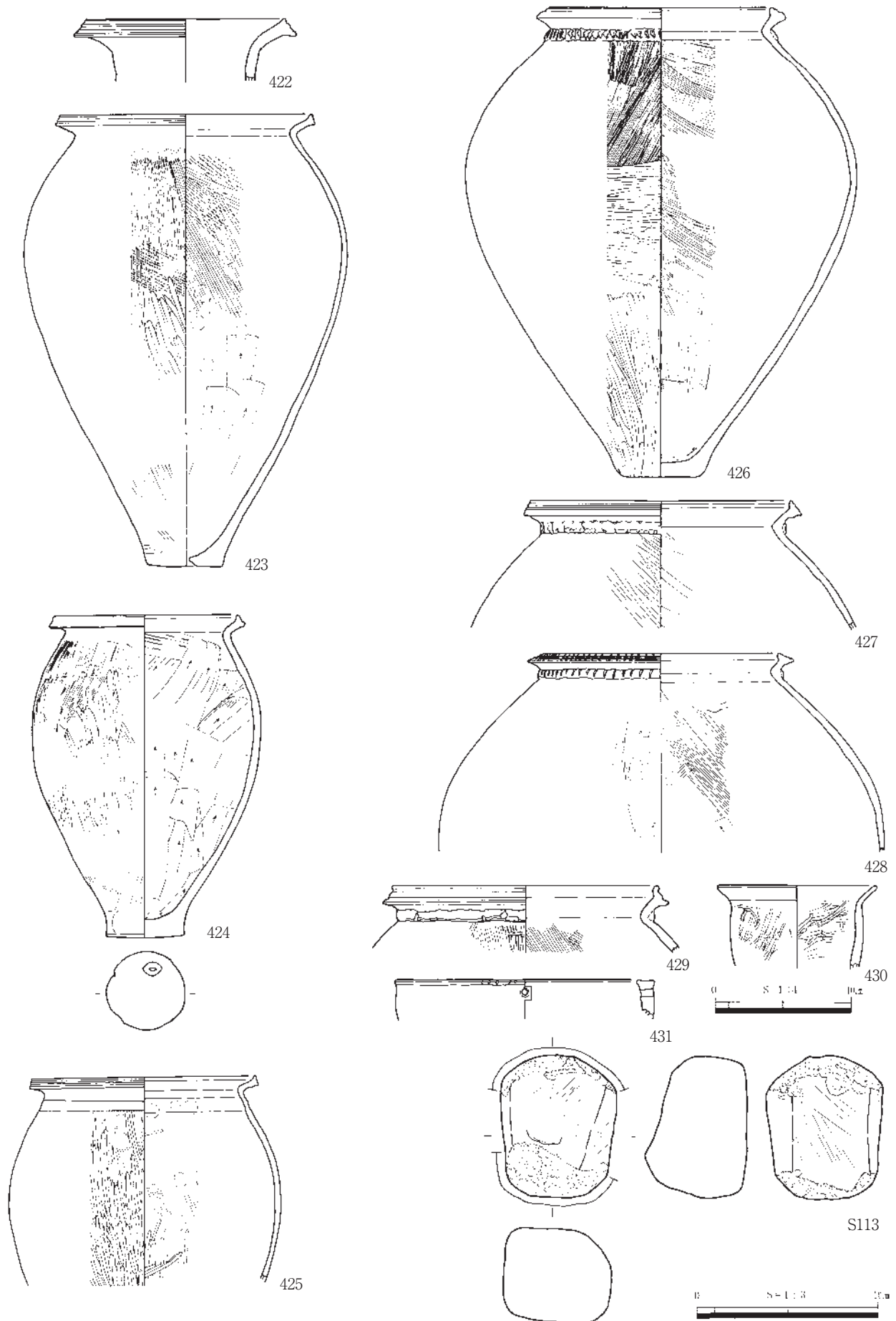
413～420は弥生土器である。413・414は壺口縁部の破片で、端部に凹線が施される。415～417は甕の口縁から胴部片である。いずれも口縁端部に3条の凹線を施しており、416・417は、頸部に刻み目突帯を巡らせている。

418・419は壺または甕の底部片であり、420は小型壺の胴部片と考えられる。

S110は安山岩製の大型石庖丁の刃部片で、S111は緑色泥岩製の磨石である。



第195図 2・3区遺構外出土遺物



第196図 2区風倒木出土遺物

### 第3章 調査の成果

これらの出土遺物は、弥生時代中期後葉(Ⅳ-2・3様式)に相当するものと考えられる。

#### 2 2・3区遺構外遺物(第195図、PL.69・83)

2・3区の表土及び攪乱土中から出土した遺物について、図化したものについて述べる。

421は軒平瓦片で、3区土器溜り2を掘り込むトレンチャーの攪乱土中から出土した。瓦当面には唐草文が施される。中世ごろのものと考えられる。

S112は無斑晶安山岩製の扁平片刃石斧片である。3区D17グリッドで出土した。

#### 3 2区風倒木痕出土遺物(第196図、PL.75・76・81・84)

2区遺構外出土遺物のうち、2区南東調査区際H10グリッドで検出した風倒木痕内から出土した遺物について述べる。これらは風倒木痕内で検出したものであるが、かなりの遺物がまとまって出土していることから、本来は土坑等の遺構内にあったものと考えられる。

422は弥生土器壺で、肥厚した口縁端部に3条の凹線が施される。

423～430は弥生土器甕である。いずれも肥厚した口縁部に凹線が施されるものである。426～429は頸部に指頭圧痕文帯が施される。430はく字状口縁部をもつ小型甕である。

431は弥生土器無頸壺である。

S113は、安山岩製の石杵で、両端部に敲打面をもつ。

これらは、清水編年Ⅳ-1～3様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。

#### 4 4区遺構外遺物(第198図、PL.79・82～84、巻頭図版2)

4区遺構外遺物のうち、表土及び攪乱土から出土した遺物について、図化したものについて述べる。

432～435は弥生土器甕で、発達した口縁部に平行沈線が施される。436は弥生土器壺で、頸部から肩部にかけて施文が施される。437は鼓形器台である。これらは、清水編年Ⅴ-3様式、弥生時代後期後葉ごろのものと考えられる。

438は分銅形土製品片である。表裏及び側縁に刺突文が施される。

439は土師器甕で、外反する口縁部をもつ。440は須恵器坏蓋で、輪状つまみをもつ。これらは、奈良時代のものである。

441は施釉陶器皿である。近世以降のものである。

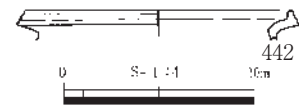
S114は流紋岩質凝灰岩製の硯片で墨池を欠く。S115・116は太型蛤刃石斧である。S117は無斑晶安山岩製の石斧片である。S118は無斑晶安山岩製の凹基石鏃で、先端部を欠く。

その他、図化はしなかったが、西側斜面表土中から鉄滓がわずかに出土している。

#### 5 5区遺構外遺物(第197図、PL.86)

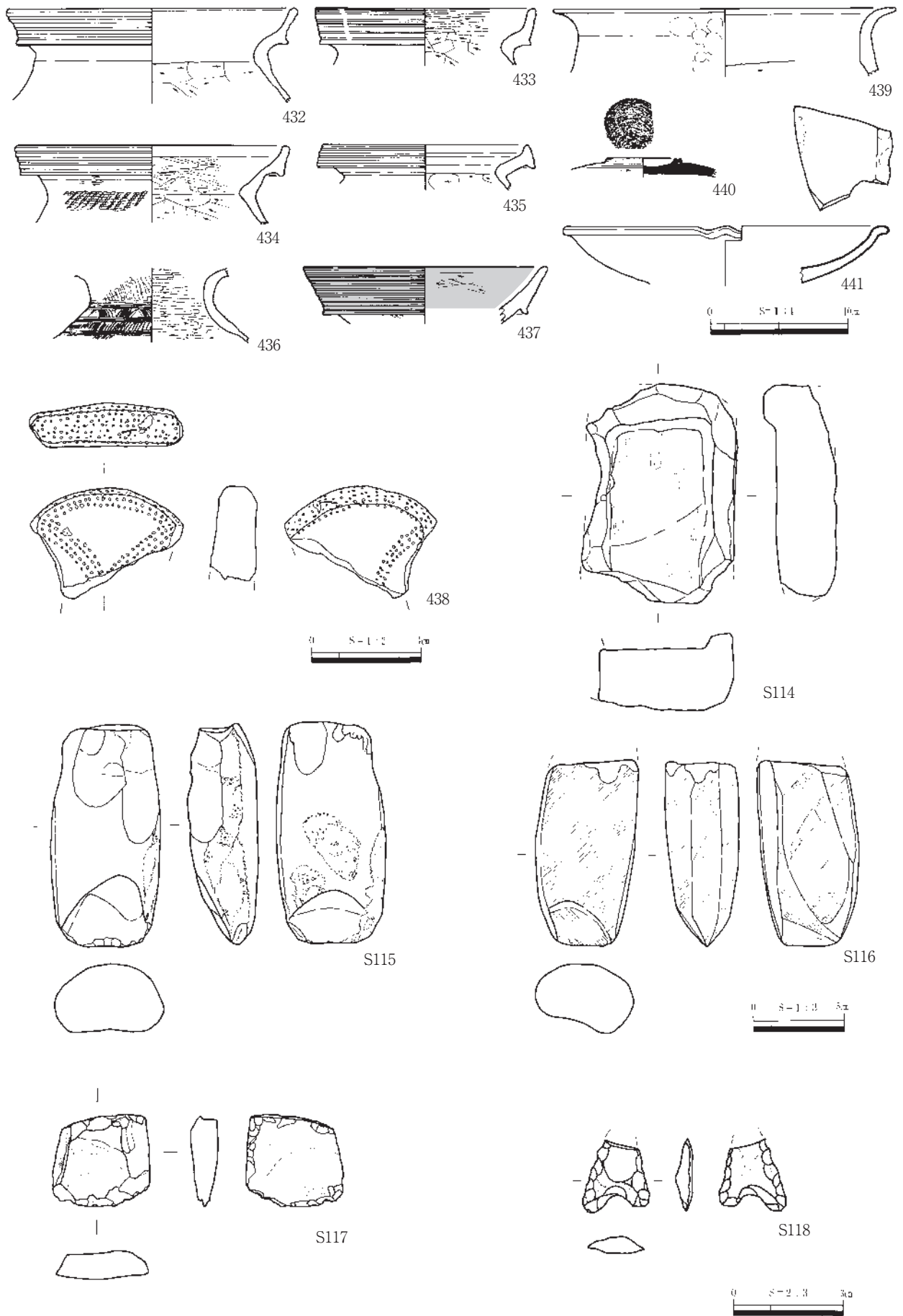
5区の表土及び攪乱土中から出土した遺物について、図化したものについて述べる。

442は、弥生土器甕で、繰り上がり口縁に3条凹線が施されるもので、清水編年Ⅳ-2・3様式、弥生時代中期後葉ごろのものと考えられる。



第197図 5区遺構外出土遺物





第198圖 4区遺構外出土遺物